

親子で楽しむ絵本

子どもにとって、大人が絵本を読み語り、いっしょに絵本を楽しむ時間は、とても幸せな時間です。



この幸せな時間を通し、子どもは本に出会い、ことばの世界を広げ、物語を味わう楽しさを知り、自分なら……と考え、ことばの力を育てていきます。

くり返しのことばのリズムやことばのやりとりのおもしろさを楽しむ

オノマトペや繰り返しのことばが醸し出す音のおもしろさ、やりとりの快さを耳で聞いて楽しみ、自分でも真似して言う。



「うんとこしょ どっこいしょ まだ まだ かぶは ぬけません。」

『おおきなかぶ』
(A・トルストイ / 再話 内田莉沙子 / 訳 佐藤忠良 / 画 福音館書店 1966年)



「シャツを はいたら どうなる？
どうすれば いいのかな？ そう
そう、シャツは きるもの。」

『どうすればいいのかな?』
(わたなべしげお / 文 おおともやすお / 絵 福音館書店 1980年)

新しいことばや美しいことばに出会い、ことばのもつ魅力や力を感じる

絵本のことばは、絵とひとつになることで、ことば自体のもつ意味以上のものを表すことを感じ取り、ことばで紡がれる物語のすばらしさを味わう。



「にじいろの ゼリーのような くらげ
……
すいちゅうブルドーザーみたいな いせえ
び……みたこともない さかなたち、みえ
ない いとで ひっぱられてる……」

『スイミー ちいさな かしこい さかなのはなし』
(レオ・レオニ / 作 谷川俊太郎 / 訳 好学社 1969年)



「さあこい！ こっちにや
二ほんの やりが ある。
これで めだまは でんがく
ざし。」

『三びきのやぎの がらがらどん』
(マーシャ・ブラウン / 絵 せたていじ / 訳 福音館書店 1965年)

絵本の登場人物との出会いを通し、さまざまな価値観や心情を知り、考える

想像により、登場人物とともに物語の世界を経験することを通し、さまざまな人がいること、そして、それぞれ違った考えや心情を抱いていることに気づく。



「とがっていた雪がまある
くなつたのは、おじいさん
のやさしい気持ちが、天の
神様に届いたからだね。」

『かさじぞう』
(瀬田貞二 / 再話 赤羽末吉 / 画 福音館書店 1966年)



「かしてーって言われても、
私はガンピーさんみたい
に、いいとも、なんて言え
ないな……」

『ガンピーさんのふなあそび』
(ジョン・バーニンガム / 作 みつよしなつや / 訳 ほるぷ出版 1976年)

(松崎行代)